

第 III 章 遺 物

1 土 器

本章では出土量の多い第151-26次調査出土遺物について述べる。

掘立柱建物 S B 1000 の柱掘形、雨落溝 S D 1010、土壇 S K 1035 から、少量の奈良時代の土器が出土した。しかし、出土土器の大半を占めるのはこれらの遺構のベースとなる 2 期にわたる整地層の中に包含された土器であり、後述のように S B 1000、あるいは S K 1035 出土の土器も本来この整地層中に包含されていた土器の一部である可能性が高い。

調査区西半には平安時代初頭の火葬墓 2 基があり、外容器あるいは骨蔵器として用いられた須恵器大甕の底部破片と灰釉陶器壺が出土した。

以下、奈良時代の遺構及び整地層の出土土器、平安時代の火葬墓の出土土器の順にその概要を説明する。土器の器種名及び製作技法の呼称については『平城宮発掘調査報告』に従うこととする。

SB1000出土土器 (fig 16-1) 掘立柱建物 S B 1000 の南廂東第 6 の柱掘形から出土した土器。須恵器椀 B 1 個体のみ。椀 B (1) は口径 9.8cm、器高 4.8cm。底部外面をヘラケズリし、底部外周やや内側寄りに外方へふんばった高台をつける。形態・調整手法の特徴から奈良時代前半期に属するものとみられる。後述する整地層の出土土器に同時期のものがあり、この椀 B もおそらく本来は整地層中にあったものが S B 1000 の造営の際に、その柱掘形の埋土中に混入したものと考えられる。

SD1010出土土器 (fig 16-2~5) 掘立柱建物 S B 1000 の北雨落溝 S D 1010 から出土した土器。須恵器杯 A・杯 B 蓋・皿 B 蓋・甕 X がある。杯 A IV (4) は口径 11.0cm、器高 3.6cm。底部外面はヘラキリままの不調整。杯 B IV 蓋 (2) は口径 12.4cm、器高 2.3cm。頂部外面はヘラキリ後、ロクロナデで仕上げ、扁平な宝珠形をつまみをつける。杯 B V 蓋 (3) は口径 11.8cm、器高 1.6cm。頂部外面はヘラケズリ仕上げ。甕 X (5) は口径 16.8cm。体部外面はカキ目調整で、一部叩き成形の痕跡を残す。体部内面及び口縁部内外面はロクロナデで調整し、口縁端部を水平に面取りして、外面上端に細い凹線 1 条をめぐらす。杯 B 蓋の形態・法量・調整手法の特徴から、奈良時代中頃の平城宮 III (750 年頃) に相当する時期のものと考えられる。

SK1035出土土器 (fig 16-6・7) 土壇 S K 1035 は掘立柱建物 S B 1000 に重複する位置で検出した方形の小土壇。埋土から土師器杯 A・皿 A と、須恵器杯 A が出土した。土師器杯 A I (6) は口径 20.2cm、器高 3.6cm。底部外面は不調整で、口縁部外面をヘラミガキし、内面に放射状暗文と連弧状暗文をもつ。皿 A I (7) は口径 22.9cm、器高 3.2cm。底部外面は不調整(木葉痕あり)で内面にラセン暗文と放射状暗文をもつ。形態・法量・調整手法の特徴から、いずれも奈良時代前半の平城宮 II (730 年頃) に相当する時期のもの

と考えられる。この土壌のベースとなる整地層の出土土器中最古の一群に一致する時期のものであり、SB 1000 出土土器の場合と同じく、土壌の開削時、あるいは埋没の際に混入したものと考えざるをえない。

整地層出土土器 (fig 16-8~21) 奈良時代の建物群は南に傾斜する丘陵斜面を 2 期にわたる大規模な整地事業によって平坦に造成した上に造営されており、調査区南半にはこの整地に伴う 2 層の整地層がある。(第 II 章 2-B 参照)

須恵器杯 H 蓋・有蓋高杯・台付壺 (8~10) は第 1 次の整地層である淡黄褐色砂質土層の出土品。杯 H 蓋 (8) は口径 12.4cm、器高 3.9cm。頂部外面へラケズリ仕上げ。有蓋高杯 (9) は蓋と脚部の大半を欠く。杯部の口径 12.4cm、受部径 15.2cm。杯部外面をへラケズリして、三方透しの脚部を接合する。台付壺 (10) は台脚部のみの破片。脚端の径 11.8cm。脚裾の屈曲部につまみ出し突帯 1 条をめぐらし、その上位の柱状部に長方形の四方透しを配する。8~10 ともに 6 世紀末頃の須恵器であり、また杯 H・有蓋高杯・台付壺の 3 種からなる器種の組合せも、この時期に最盛期を迎える群集墳の一般的な副葬品の組合せに一致する。整地に際して破壊された古墳の存在を想起させる遺物であるが、今回の調査区内では古墳の痕跡を検出していないため確言はできない。

土師器杯 C・皿 A、須恵器杯 B・杯 B 蓋・皿 B 蓋・鉢 A・壺 A 蓋・壺 K (11~18) は、第 2 次の整地層である灰黄褐色砂質土層の出土品。土師器杯 CI (11) は口径 16.8cm、器高 3.6cm。底部外面は不調整で、内面にラセン暗文と放射状暗文をもつ。皿 AI (12) は口径 21.4cm、器高 2.9cm。同じく底部外面は不調整 (木葉痕なし) で、内面に、ラセン暗文と放射状暗文をもつ。須恵器杯 BV (16) は口径 10.5cm、器高 4.1cm、底部外面はへラキリままの不調整。杯 BI 蓋 (14) は口径 21.5cm、器高 2.0cm。頂部外面をへラケズリして、偏平な宝珠形につまみをつける。頂部が平たく、口縁部がわずかに屈曲する A 形態の蓋。鉢 A (17) はいわゆる鉄鉢形。口径 20.4cm、体部の最大径 22.5cm。体部外面下半をへラケズリした後、器面全面をロクロを利用したへラミガキで平滑に調整して仕上げる。壺 A 蓋 (15) は口径 14.2cm、器高 4.0cm。頂部外面をへラケズリして、宝珠形につまみをつける。壺 K (18) は底部のみの破片。外方へよくふんばった高台をもつ。高台の外径 11.2cm。

土師器甕 B、須恵器杯 B・杯 B 蓋・椀 A・壺 K (19~24) は試掘調査時に出土したもの。整地層確認以前の出土品であるが、各土器の出土層位、あるいは形態・調整手法の特徴から、本来先に述べた第 2 次の整地層中に包含されていた土器の一部と考えられる。土師器甕 B (24) は口径 26.2cm。体部外面は縦位のハケ目、内面はナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデ調整して仕上げ、口縁端部はわずかに上方へ突出する。須恵器杯 BIV (21) は口径 13.0cm、器高 4.4cm。杯 BIV (22) は口径 13.3cm、器高 4.2cm。底部外面はいずれもへラケズリ調整で、底部外周やや内寄りに外方へふんばった高台をつける。杯 BV 蓋 (19) は口径 10.9cm、器高 2.0cm。頂部外面とへラケズリ調整し、偏平な宝珠形につまみをつける。

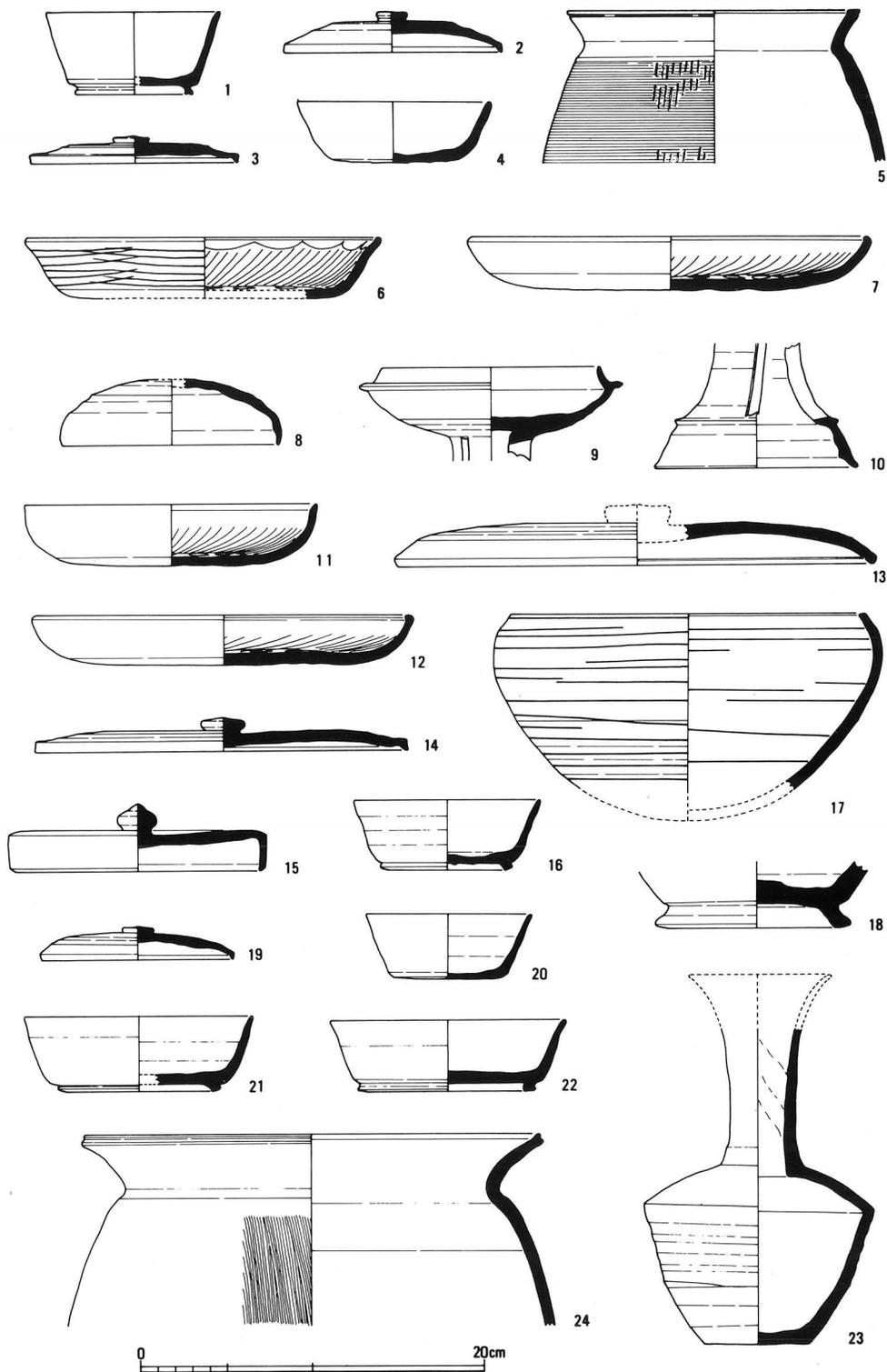


fig. 16 土器 (S B1000-1、S D1010-2~5、S K1035-6、7、整地層-8~24)

頂部が笠形で、口縁部の屈曲しないB形態の蓋。椀A(20)は口径9.2cm、器高3.8cm。底部外面はヘラケズリ調整。壺K(23)は高台をもたない平底のもので、口縁部を欠く。体部の最大径13.3cm。体部下半と底部の外面をヘラケズリして仕上げる。体部外面上半にはロクロによる調整痕(いわゆるロクロ目)が著しい。

第2次整地層の出土土器の中で、須恵器壺K(18・23)は奈良時代前半の平城宮II以前にはほぼ限定できる器種であり、また土師器杯C(11)、皿A(12)、須恵器杯B(16・21・22)、杯B蓋(14・19)もそれぞれの形態・法量・調整手法の特徴から、平城宮II、あるいは奈良時代中頃の平城宮IIIに相当する時期のものとみることができる。従って、器形及びその所属時期の判明するものに限って言うならば、整地層の出土土器はほぼ奈良時代の中頃以前のものに限られることになる。なお、第2次整地層からは奈良時代の土器とともに、少数ながら円筒埴輪・囀形埴輪・形象埴輪の破片が出土しており(PL25-26,27)、調査区付近にこれらの埴輪を伴う中期の古墳があった可能性がある。

SX1074・1075出土土器(fig.17) SX1074・1075は掘立柱建物SB1070に重複する位置で検出した2基の火葬墓である。

SX1074では、墓壇内に据えた大形の須恵器甕の底部破片が出土した。丸底で、内面に同心円文、外面に平行叩きの成形痕を残す。削平のため上半部の形態は不明。

SX1075では、木製の外容器(木櫃)に納めた灰釉陶器壺Aが骨蔵器として用いられており、蓋を伴う完全な状態で発見された。蓋と身は別焼成で、身は口径12.3cm、体部の最大径30.7cm、器高26.0cm。体部外面の中位以下と底部外面を丁寧にヘラケズリして、外方

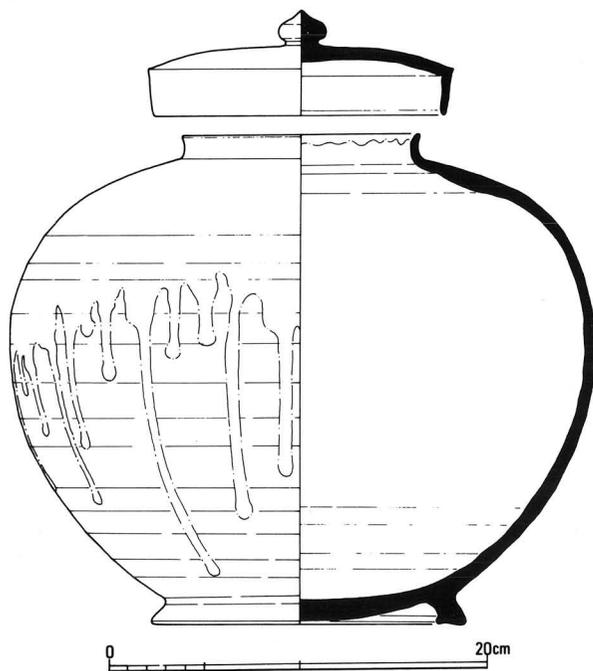


fig. 17 SX1075 出土骨蔵器

へふんばった高台をつけ、体部内面はコテを用いて平滑な器面に仕上げる。口縁端部内面から体部外面の上半に灰緑色の灰釉をかけ、体部下半にも溶融した釉が多数垂下する。蓋は口径15.3cm、器高5.6cm。頂部外面をヘラケズリして、宝珠形のつまみをつける。口縁端部はロクロナデで調整し丸くおさめる。頂部外面とつまみの全面に灰緑色の灰釉がかかるが、口縁部外面は無釉。珠形に近い体部、蓋のつまみ及び口縁端部の形態から、9世紀前半のものと推定される。

2 瓦

瓦は主にH調査区の中央部とI調査区の北西部から、整理平箱で約30箱が出土した。その多くは丸瓦・平瓦で、軒瓦は軒丸瓦が17点、軒平瓦が10点ある。

A. 軒瓦 (fig. 19-1~6) 軒丸瓦の内訳は6272型式B種1点、6316型式M種4点、6319型式A種12点である。軒平瓦は6710型式D種8点のほか、瓦当を欠くものが2点ある。

6272型式B種 (1) 6272型式は外区に珠文と面違い鋸歯文をめぐらせた複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。A種とB種がある。ともに中房が突出し、蓮子が1+4+8だが、B種はA種に比べて中房、蓮子、珠文が小さく弁も細い。胎土は精良で明茶褐色を呈するが、焼成は軟質である。復原径約18.6cm。H調査区の第2次整地土中から出土した。

6316型式M種 (3) 6316型式は複弁で、子葉を分離する弁中央の線がなく間弁もないのが特徴である。A~K種と今回新たに設定したM種がある。M種は複弁8弁で、外区に珠文20と線鋸歯文をめぐらせる。蓮子は1+4で中房が突出する点はC種に似るが、中房径はやや大きく弁も長い。瓦当径13.1cmと6316型式のなかではI種について小さい。瓦当面を焼成前に深くナデた例(PL. 16-5)があるが、後述する奈良市菅原遺跡出土例(fig. 20-3, tab. 1-27)から、範割れによって生じた粘土のはみだしを整形したものと推測される。丸瓦の接合位置は低く、瓦当裏面は下半部を深くえぐる(PL. 16-6)。大きさや胎土からM種の丸瓦部と考えられる例(4)は凸面を縦方向に篋削りする。凹面は瓦当寄りを縦方向になでる。胎土は細砂を若干含む。軟質で暗黄褐色を呈するものと、硬質で暗青灰色ないし灰色を呈するものがある。SB 1080の掘形から2点、SD 1110から1点出土。

6319型式A種 (2) 6316型式に類似するが、間弁があることから今回新たに6319型式を設定しA種とした。複弁8弁で外区には珠文16と疎な線鋸歯文をめぐらせる。中房は突出し、蓮子は1+4である。瓦当径13.0cm。丸瓦の接合位置は低く、接合に際して丸瓦の端面に刻み目を入れた例がある。瓦当裏面は横方向になでて平坦につくるもの、板状工具で縦方向に搔きとって平坦につくるもの(PL. 16-7)及び深く窪ませるもの(PL. 16-8)がある。丸瓦部の凸面は縦方向に篋削りし、凹面は瓦当寄りを縦方向になでる。胎土は細砂を若干含む。軟質で黒褐色あるいは黄褐色を呈するもののほか、比較的硬質で灰白色を呈するものがある。SB 1080の柱掘形、SK 1117及びI調査区の第2次整地土中から各1点、SD 1110から3点、I調査区北西部の表土から6点出土している。

6710型式D種 (5) 6010型式は外区に珠文をめぐらせた3回反転の均整唐草文軒平瓦で、



fig. 18 6710型式D種拓本(右ポジ, 左ネガ)

山形の中心飾をもつのが特徴である。A・C種と今回新設定のD種がある。D種はA・C種と異なって、中心飾と唐草文の周囲を凹線で二重に縁どる手法、範型でいえば中心飾と唐草

文の輪郭線を残して他を一段低く彫り込む手法 (fig. 18) をとっている。瓦当の厚さ5.1cm、菅原遺跡出土例によると上弦幅26.3cm、全長44.4cmとなる。顎は直線顎で横方向になで、瓦当近くの凹面は横方向に篋削りする。平瓦部の凸面は縦及び斜め方向の縄叩き目を施すが、凸面全体を縦方向に篋削りするものがある。前者の凹面は布目のままであるが、後者には凹面を縦方向になで、凸面の側縁を深く面取りするものもある。胎土は細砂をやや多く含む。軟質で暗灰色あるいは暗黄褐色を呈するものと、比較的硬質で灰白色を呈するものがある。SB 1080、1095の柱掘形とSD 1110から各1点、SD 1010から2点出土している。なお瓦当を欠くもの(6)が2点あるが、平瓦部の調整手法は6710型式D種と一致し、凹面の狭端近くに布端痕が残る。硬質で黝黒色を呈し、一部に自然釉が認められる。I調査区の第2次整地土とSB 1080の柱掘形から各1点出土している。

B. 丸瓦・平瓦 (fig. 7~9) 丸瓦はいずれも玉縁が付くものである。凸面は縦方向の縄叩きを施したのち丁寧に縦ないし横方向になで、凹面は未調整で布目が残る。胎土は細砂を含み、軟質で黒褐色、暗黄褐色、淡褐色を呈するもののほか、やや硬質で灰白色を呈するものがある。大きさから3種に区分できる。大形の丸瓦は全長が不明だが、玉縁部近くでの径が12.9~13.3cm、厚さ2.0~2.2cmである。約8個体あり、うち広端部の破片が3個体ある。中形の丸瓦は全長約34cm、中央部での径12.1~12.3cm、厚さ1.5~1.7cmである。丸瓦のなかでは最も量が多い。広端部の破片が約13個体ある。小形の丸瓦は全長約33cm、中央部での径11.3cm前後、厚さ1.2~1.3cmである。約10個体でうち広端部の破片が3個体ある。なお大形と中形の丸瓦のなかには、側面に分割破面を残すものが少量あり、分割截線を凹面から入れる例と凸面から入れる例 (PL. 16-9・10) とが認められた。

平瓦はほとんどが凸面に縦及び斜め方向の縄目を残し、凹面も未調整で布目を残す。大きさから3種に大別できる。大形の平瓦は全長約35cm、厚さ2.2~2.6cmである。凸面の縄目が細かく、凹面に模骨痕、糸切痕、布の合わせ目痕が残る桶巻き作り例(7)と、縄目が荒い一枚作りと考えられる例とがある。前者は約10個体である。胎土に細砂と黒粒を含み比較的硬質で青灰色を呈するものと、黒粒を含まず軟質で黒褐色あるいは暗黄褐色を呈するものがある。後者は約6個体で、細砂を含み軟質で赤褐色を呈する。中形の平瓦は全長が不明だが、厚さが1.8cm前後である。明確に桶巻き作りと認められるものはない。平瓦のなかではもっとも量が多い。凸面の縄目が細かいものと、荒いもの(8)とがあり、量は前者がやや多い。胎土に細砂を含み、ほとんどは軟質で黒褐色、暗黄褐色、淡褐色ないし灰白色を呈する。縄目の細かいものには凹面のほぼ全体を縦方向になでるもの、縄目の荒いものには凹面の広端から側縁にかけて布端痕の残る一枚作り例がある。小形の平瓦は全長28.5cm以上、広端の上弦幅約24cm、厚さ1.0~1.4cmである。約20個体あり、縄目の細かいものと荒いものとはほぼ等量である。胎土に細砂を含み軟質で黒褐色ないし暗黄褐色を呈するものが多い。縄目の荒いものには一枚作り例 (fig. 19-9, PL. 16-11) がある。

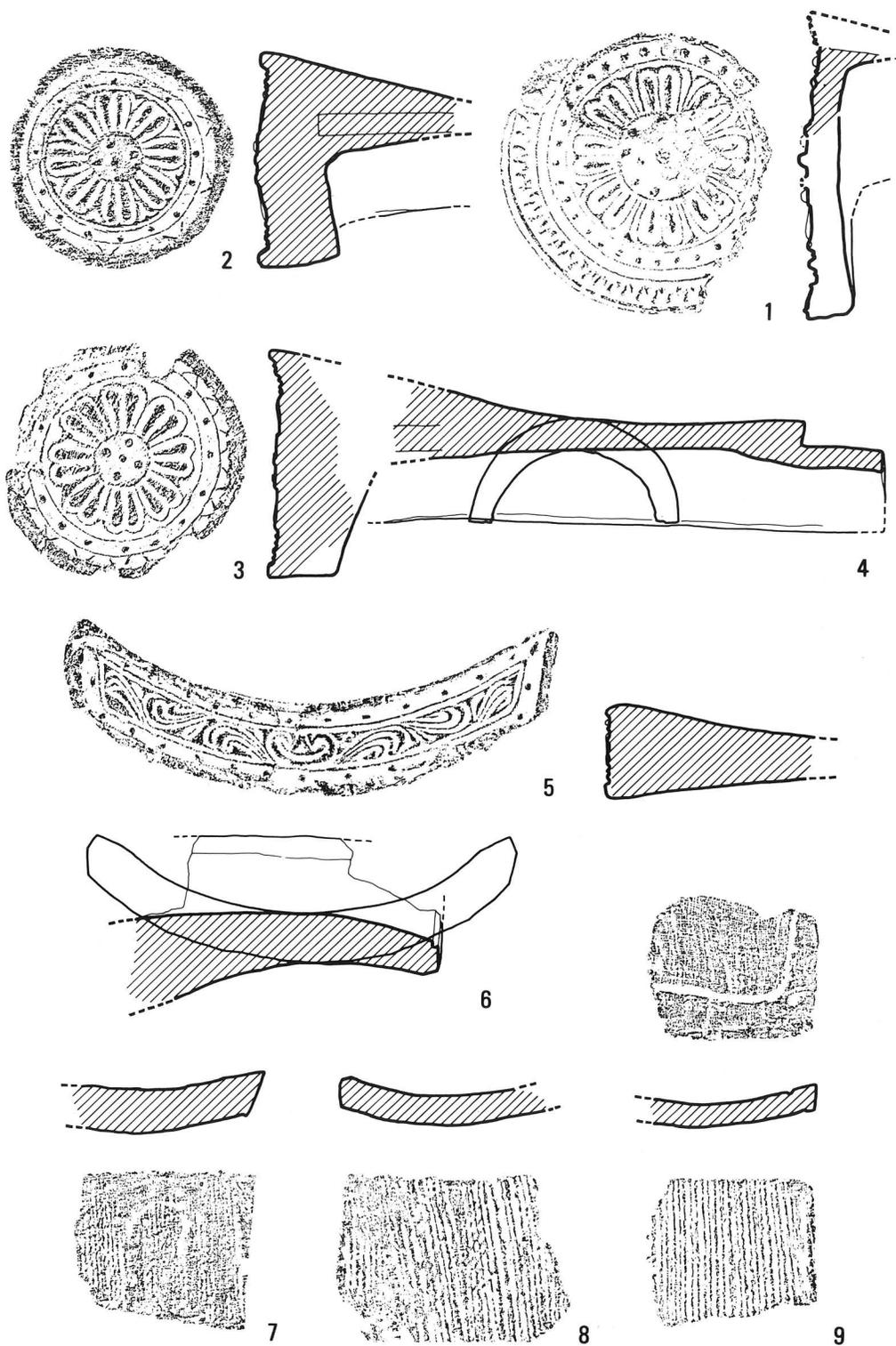


fig. 19 瓦 (1/4)

C. 小結 今回出土した瓦について年代を比定し、その特色について触れておこう。

軒丸瓦6272型式B種は平城京左京二条二坊十三坪、二条五坊九坪、三条二坊九坪、右京九条一坊十二坪などから出土している。このうち右京九条一坊十二坪では6272型式A種も出土し、軒平6644型式A～C種との組み合わせ (fig. 20-1) が指摘されている。6272型式は蓮子が二重で外区に珠文と面違い鋸歯文をめぐらせる点、重弧文軒平瓦と組み合わせる軒丸瓦6271型式に類似するが、中房径が小さく偏行唐草文軒平瓦6644型式と組み合わせるなどの点から時期は新しくなる。出土例が平城京内に限定されることから8世紀前半も比較的古い時期に比定できよう。大きさや製作技法などから大形の丸瓦・平瓦が組み合わせるが、一枚作りと考えられる縄目の荒い大形の平瓦は後補もしくは他型式の軒瓦の存在を暗示する。

軒丸瓦6316型式M種と軒平瓦6710型式D種は平城京外西郊の菅原遺跡で出土し、軒瓦の主要な一組 (fig. 20-3) となっている。6316-6710型式は平城宮では出土するが数が少なく、左京三条二坊十五坪、右京九条一坊四坪、朱雀大路沿い (fig. 20-2) など平城京内での出土例が増加しつつある。時期は平城宮出土軒瓦編年第三期 (天平17年～天平勝宝年間) に比定されている。6316型式M種及び軒平瓦6710型式D種もその時期を大きく隔たることはないと考えられる。大きさから中形の丸瓦・平瓦が組み合わせる。

軒丸瓦6319型式A種は初出例である。文様の構成は6316型式に類似し、ほぼ同じ時期に比定できよう。大きさから小形の丸瓦・平瓦が組み合わせる。6319型式A種に組み合わせる軒平瓦は不明だが、6710型式D種が用いられたのかもしれない。

今回調査した地域においては、8世紀前半も比較的古い時期と、8世紀後半の瓦が認められ、しかも両時期の瓦とも平城宮では出土せず、平城京やその周辺の遺跡と同範関係をもつことが明らかとなった。また6316型式M種や6319型式A種については、瓦当径が13～14cmと小さいが、これに組み合わせる丸瓦・平瓦が存在することから、棟に用いた葺瓦ではなく、軒先に用いたことが判明した。

註 1 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984 P. 28

2 菅原遺跡調査会「菅原遺跡の小型瓦」(『古代研究』25・26 1983) P. 9～23

3 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』(『奈良国立文化財研究所学報』第25冊 1975)

4 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料II 瓦編2解説』1975 P. 16

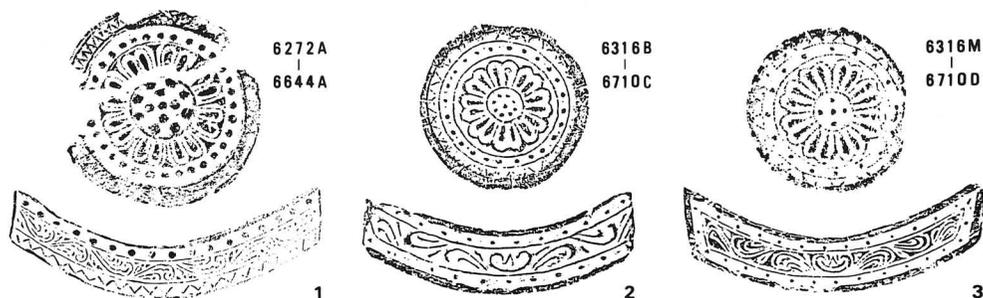


fig. 20 平城京および周辺遺跡出土軒瓦

3 その他の遺物

A. SX 1075出土遺物 火葬墓 SX 1075から鉄釘、水晶丸玉、金属溶解物が出土した。

鉄釘 (fig. 23・24, P.L. 17・18, tab. 4) SX 1075の墓壙からは、木櫃の組み立てに用いた鉄釘が54本出土している。1～48は角釘で、頭部から先端に向って直線的に細くなる楔状の形態を示し、頭部を折り曲げたり叩き伸ばしたりしていない。断面形は長方形を呈するものが多い。長さは完形品で最大10.0cm、最小8.1cmとまちまちであるが、9cm前後のものが多い。脚部径は0.5cm前後である。全体に保存状態が良好で、木質の残りが良い。木質の木目方向によってA～Cの3種類に分けることができる。Aは上半部の木目が横方向で、下半部の木目が脚部に沿って縦方向につくものである。この種の釘は木櫃の側板を打ち付けたもので、木櫃の四隅にそれぞれ6本ずつ用いられる。Bは上半部・下半部とも木目が横方向につくものである。この種の釘は蓋板と底板を側板に打ち付けた釘で、上半部・下半部の木目が同一方向になる。側板の北面と南面に用いられた。CはBと同様上半部・下半部とも横方向の木目であるが、上半部と下半部の木目が直交する。これも蓋板と底板を側板に打ち付けた釘で、側板の東面と西面に用いられた。いずれの釘も2枚の板の合せ目が、木目の違いとして観察できる。そのため木櫃に使用された板の厚さがほぼ4cm前後であったことがわかる。ただし底板だけはやや薄く、3.6cm前後の板を用いている。

49～54は両端をとがらせた偏平なやとい釘。長さ12.1cm～13.0cm。中央部の断面は長方形で厚さ0.4cm～0.6cm。幅0.8cm～1.0cm。柳葉形のもの(50,51,52,54)と、偏平な棒状

品の両端だけを尖らせるもの(49,53)とに分けられる。木目はいずれも横方向で、脚部との関係はBと同じである。Dとして区別しておく。

以上のように鉄釘に付着した木目の方向と出土位置とによって、使用された部位と木櫃の規模・組み立て方法が復原できる。側板は柾目の板材を横に使ひ、四隅は六枚組とする。側板両端にそれぞれ3本ずつ出柄をつくり出し、組み合わせたのち各柄すべてに鉄釘を打ち込んで固定する。蓋板と底板は、2枚の板目材を3本のやとい釘でとめたものを用いる。側板への接合はいも付けであったと推定され、蓋板は鉄釘13本、底板は同10本を用いて側板に固定する。

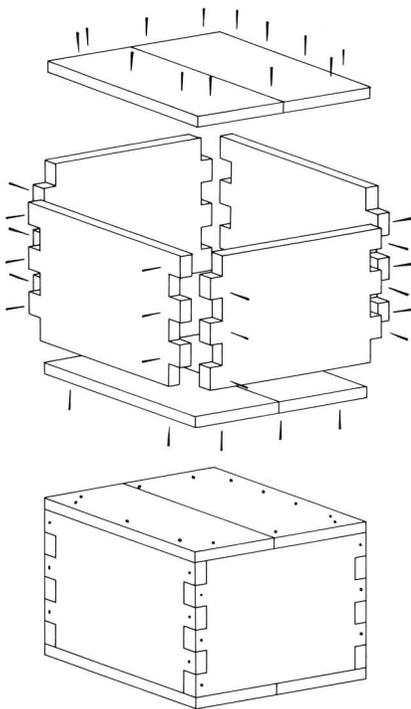


fig. 21 SX 1075 木櫃復原図

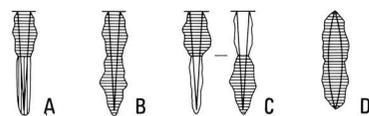
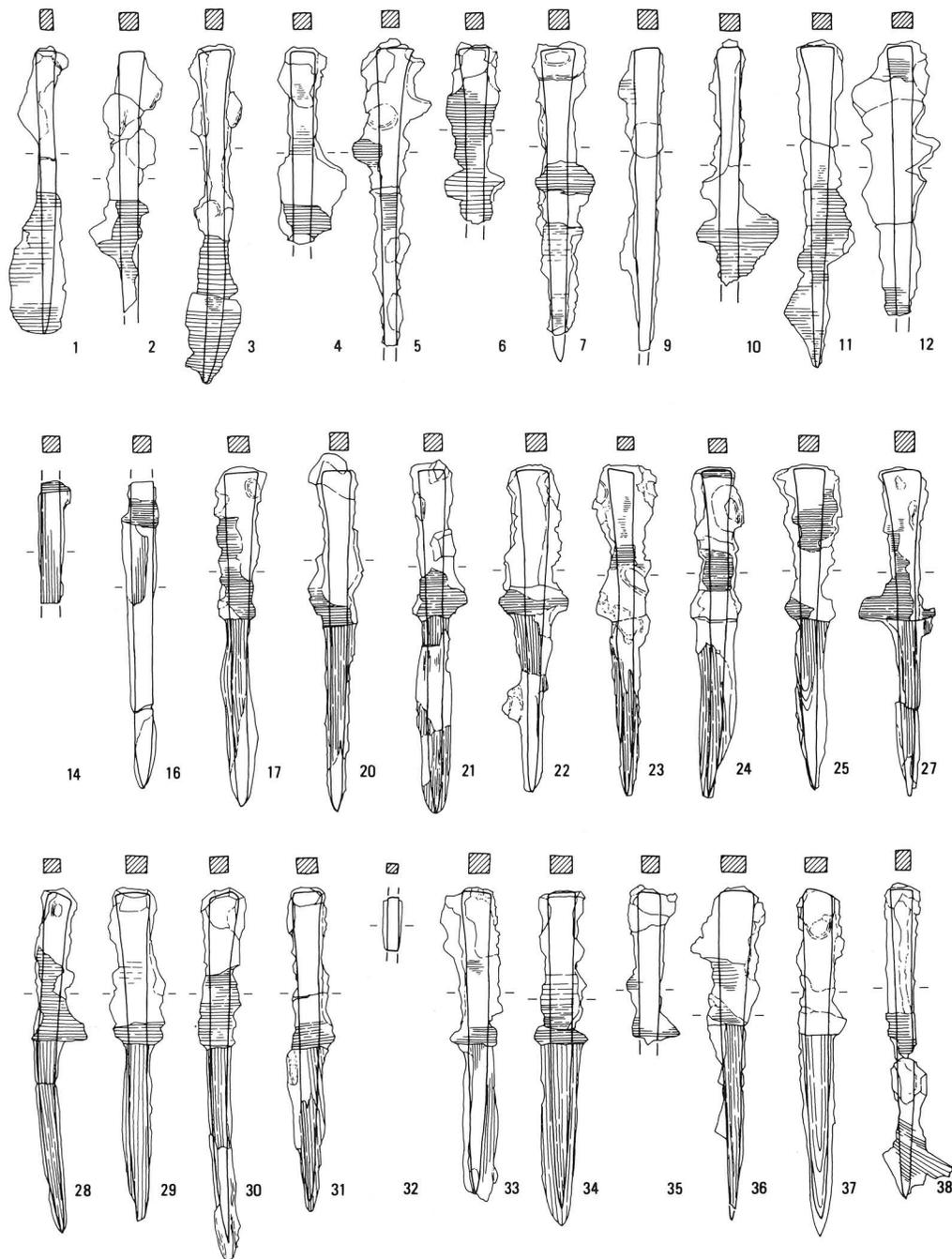


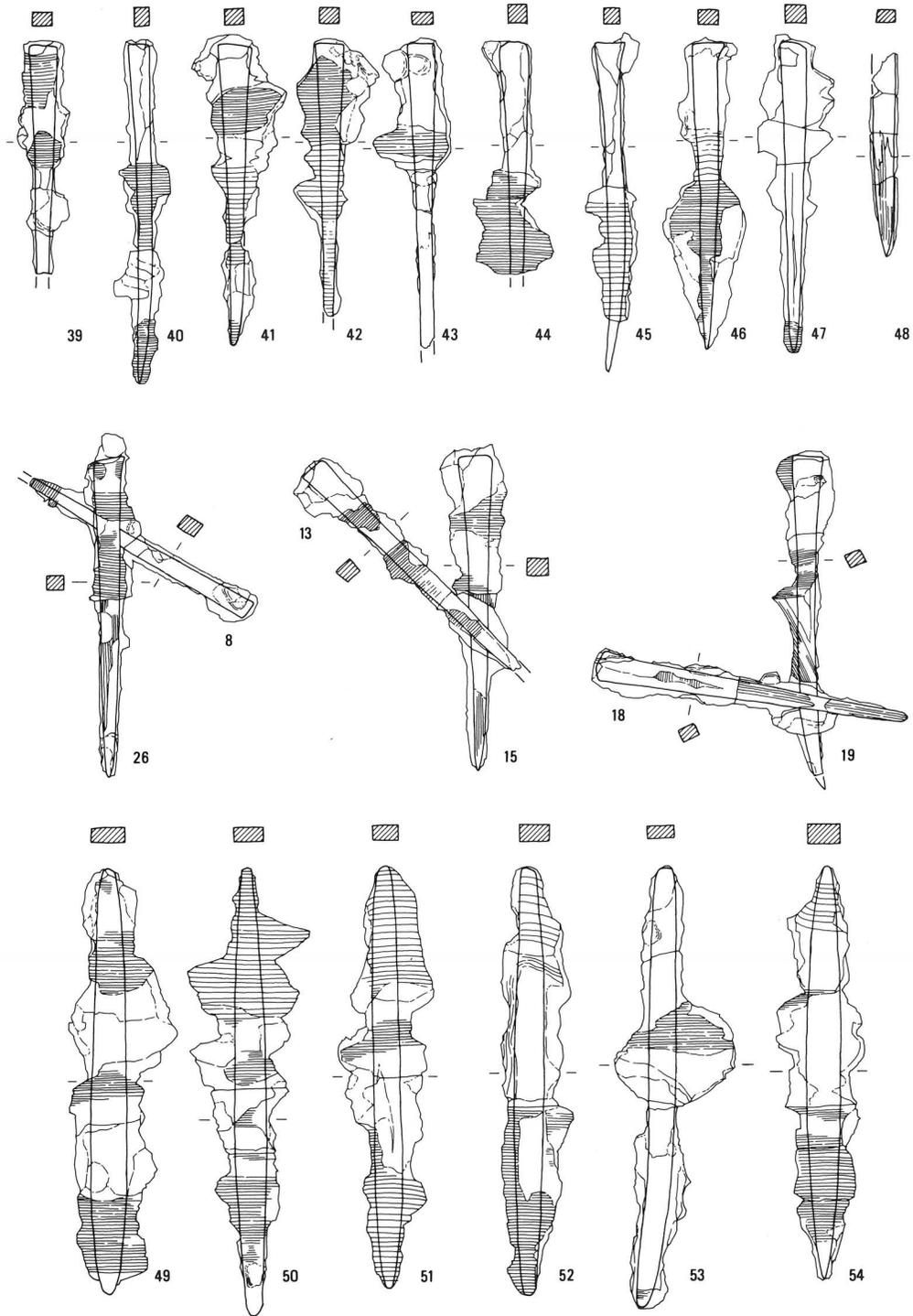
fig. 22 鉄釘に付着した木質の状況模式図



使用部位 上段：蓋板 中段・下段：側板

0 10cm

fig. 23 鉄釘1 (1/2)



使用部位 上段：底板 下段：蓋板・底板のやとい釘

fig. 24 鉄釘 2 (1/2)

No.	全長	釘長	脚 径	残存状態	木目	板厚	使用部位
1	8.15	8.1	0.6×0.4	完	C	4.0	蓋板東南隅
2	(7.4)	(7.4)	0.55×0.5	先端欠	C	4.2	東南中央
3	9.7	9.5	0.6×0.5	完	C	4.2	東北隅
4	(5.6)	(5.5)	0.5×0.5	半分欠	B	4.4	東北隅
5	(8.8)	(8.5)	0.5×0.5	先端欠	B	—	北面中央
6	(5.2)	(5.0)	0.5×0.5	半分欠	B	—	北面中央
7	(8.4)	(8.2)	0.6×0.6	先端欠	B	—	西北隅
8	(7.3)	(7.4)	0.6×0.45	先端欠	C	4.2	西北隅
9	(8.6)	(8.6)	0.55×0.55	1/3欠	—	—	西面中央
10	(7.1)	(6.8)	0.6×0.5	完	C	4.6	西南隅
11	9.3	9.2	0.5×0.5	完	B	4.0	西南隅
12	(7.8)	(7.15)	0.6×0.5	先端欠	B	—	南面中央
13	(8.5)	(8.3)	0.5×0.5	先端欠	B	—	東南隅
14	(8.5)	(8.3)	0.5×0.45	先端欠	A	—	東南隅
15	9.4	9.1	0.5×0.5	完	A	4.0	—
16	(8.7)	(8.5)	0.5×0.5	頭部欠	A	—	—
17	9.7	9.5	0.6×0.5	完	A	4.2	—
18	9.1	9.0	0.5×0.4	完	A	4.2	—
19	(9.5)	(9.4)	0.5×0.4	先端欠	A	4.1	—
20	10.2	9.7	0.5×0.5	完	A	4.4	側板北隅
21	10.1	9.8	0.5×0.5	完	A	4.1	—
22	9.2	9.0	0.5×0.5	完	A	4.1	—
23	9.4	9.3	0.5×0.4	完	A	4.2	—
24	9.4	9.3	0.5×0.4	完	A	4.3	—
25	9.2	9.1	0.5×0.45	完	A	4.3	—
26	10.0	9.3	0.5×0.4	完	A	4.1	側板北隅
27	9.4	9.3	0.6×0.6	完	A	4.3	—

No.	全長	釘長	脚 径	残存状態	木目	板厚	使用部位
28	9.8	9.6	0.5×0.4	完	A	4.2	側板西北
29	(9.5)	(9.3)	0.6×0.5	先端欠	A	4.3	—
30	10.1	10.0	0.5×0.5	完	A	4.3	—
31	8.9	8.8	0.6×0.5	完	A	4.3	—
32	(1.5)	(1.5)	0.3×0.3	先端残る	A	—	側板西南隅
33	9.4	8.9	0.6×0.6	完	A	4.4	—
34	9.6	9.1	0.7×0.5	完	A	3.9	—
35	(4.6)	(4.3)	0.5×0.5	半分欠	A	—	—
36	(9.2)	(9.1)	0.7×0.5	先端欠	A	3.8	—
37	9.9	9.4	0.6×0.4	完	A	3.7	—
38	9.0	8.8	0.6×0.45	完	A	3.5	—
39	(6.8)	(6.7)	0.55×0.45	先端1/3欠	C	3.7	—
40	10.2	9.9	0.6×0.45	完	C	3.5	—
41	9.1	8.8	0.5×0.5	完	B	3.6	—
42	(8.1)	(8.0)	0.6×0.5	先端欠	B	4.2	—
43	(9.1)	(9.0)	0.6×0.4	先端欠	C	3.7	—
44	(7.1)	(6.8)	0.55×0.55	先端1/3欠	C	3.8	—
45	(9.9)	(9.7)	0.5×0.5	先端欠	C	4.2	—
46	9.1	9.0	0.6×0.4	完	B	4.0	—
47	9.3	9.1	0.6×0.5	完	B	3.5	—
48	5.9	5.9	0.5×0.4	1/2残る	D	—	—
49	12.2	12.2	0.8×0.4	完	D	—	—
50	13.0	13.0	0.9×0.4	完	D	—	—
51	12.4	12.4	1.0×0.4	完	D	—	—
52	12.1	12.1	1.0×0.4	完	D	—	—
53	12.9	12.9	0.8×0.4	完	D	—	—
54	12.5	12.5	0.9×0.5	完	D	—	—

tab. 4 鉄釘計測表 (単位cm 脚径は頭部から3cm下で計測)

水晶丸玉 (fig. 25-3) ほぼ半截している。中央に垂直に穿たれた小孔が貫通する。全面に無数の小さなヒビが入るため透明感は失われている。熱を受けたためと思われる。直径6.7mm、高さ5.9mm、孔径1.8mm。

金属溶解物 熱を受けて溶解した金属の薄片が4片出土した。内2片は滴状で、にぶい銀色を呈する。他の2片は表面灰黒色を呈する。最大のもので長さ13.2mm、太さ3.4mm。蛍光X線分析の結果、いずれも銀であることがわかった。以上の水晶丸玉と金属溶解物は骨蔵器内から人骨にまじって出土した。

B. その他の出土遺物 (fig. 25) SX 1075以外からの出土遺物をまとめて述べる。

五輪塔水輪 上下の平坦面に緩やかな突起があり、下の突起の一部を欠失する。最大径は中央やや上寄りにある。細粒黒雲母花崗岩。径25.1cm、高さ18.0cm。H調査区表土出土。

鉄釘 (fig. 25-4・5) 4は小形の折頭釘。残存長7.6cm、脚部径0.15×0.4cm。4分割しており、保存は良くない。SB 1050の西側柱南から3番目の柱掘形より出土。5は大形の方頭釘である。残存長6.1cm、頭部の一辺2.3cm~2.5cm、脚部径長6.1cm、頭部の一辺2.3cm~2.5cm、脚部径1.1cm。脚部径から復原すると、全長20cmほどになる。SK 1117出土。

るつぼ、鑄型、壁土 SK 1117付近から焼土にまじって鑄型かと思われる焼土塊やるつぼ片が出土した。SK 1025からはるつぼ片SB 1020の柱掘形からは壁土の破片が出土した。

石器 いずれもサヌカイトの剥片で調整(リタッチ)はない。1は旧石器時代の瀬戸内技法に伴う翼状剥片で、下半部が欠損している。全体に風化が著しい。現存長3.2cm、幅1.9cm。2は横長剥片で、1に比べると風化が少なく、縄文時代の可能性もある。長さ4.2cm、幅1.8cm。SB 1000の柱掘形埋土出土。

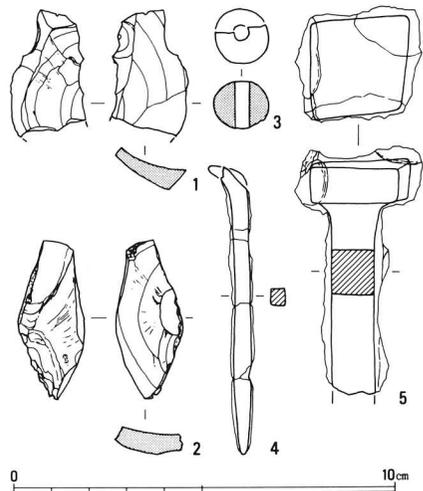


fig. 25 石製品, 金属製品 (3のみ実大)